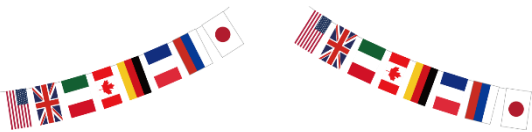


スポーツおじいさんにないたい！⑤



『リベンジ・マッチ』

國友万裕



1. 吾輩は猫である

先日、マッサージのお兄さんに「俺は黒猫が好きなんだ。だけど、ペットを飼えるようなマンションじゃないし、掃除とかできない性格だから」と話した。するとお兄さんから、「猫は 15 年くらい生きるから、今飼ったら、ちょうど同じ頃に死ぬるかもしれないですよ」と言われてしまった。ギクッ(笑)。

そのお兄さんはまだ 20 代の人なので、俺なんかもう 15 年も経てば死ぬ人というふうに思っているのだろう。今は人生 100 年時代だから、まだ 30 年以上生きる可能性だってあるのに。

まあ、確かになあ。俺が大学院を出る頃、30 歳になったばかりの頃だ。当時お世話になっていた指導教授が 70 過ぎて、仕事を辞められるので、教授の研究室に掃除の手伝いに行った。そこには俺も含めた若い教え子は何人か来ていたが、一人だけ、もう 70 ぐらいにはなるんじゃないかと思うような教え子の人が一人来ていたのである。この歳になった、かつての教え子と交流しているというのは流石この先生の人徳だなあとは思ったものだった。

しかし、自分が 60 代になってみると 30 の時なんて昨日のことみたいなのである。

お兄さんが言うように、確かに元気でいれるのはあと 15 年くらいかもしれないのだ。実際、ニュースで芸能人の訃報なんかを見ていると、70 代後半で亡くなる人は多い。西田敏行が 75 歳、いしだあゆみが 76 歳。

老いと死は刻々と近づいてくるのに、俺は全然、悟りの境地に達することができないのだ。

俺の人生を振り返ってみると、小学校高

学年くらいから潮流から外れていき、中学は女性からの虐待、そして高校で不登校。そこから這い上がるのに残りの人生を費やしてしまった。

そして、俺はいまだに女性に対する憎しみをどうすることもできないのである。女は魔物だ。今日は俺に好意的な女性でも、明日はどうなるかわからない。だから怖いのである。

こういう痛恨の思いを抱えたまま、俺は人生を終えるのだろうか。

それはそれで構わないだろう。もうとりあえず、先は長くない。もうこれから得られるものは少ないかもしれないけれど、これからは猫になって生まれ変わって、後の15年を俺の真の人生だと思って生きるのもいいのかもしれない。

長くても、短くても、辛くても、楽しくても、それが人生なのである。人生に優劣はない。それは歳をとるにつれて実感していることなのである。

これからは猫として生まれ変わった気持ちで生きてみようと思った。吾輩は猫である。

2. 歳だからこそ、おしゃれ。

ここ数ヶ月は正直って、辛いことの方が多かった。だから今この原稿にそれをぶちまけることも考えた。しかし、それをすると差し障りが出てくるようなことばかり起きたのである。本音を書くのがこのマガジンだから、書いてもいいのかも知れないが、記憶が生々しい間は書かない方がいいかとも思った。

ところが、そうなると書くネタがなくな

ってくるのだ。

とりあえず、今の俺は死ぬ時のことばかり考えている。というか、死そのものよりも、これから老いていく自分のことを考えている。

これから何をすれば残りの人生、悔いなく生きられるのだろうか。

もう今更、社会的な名誉なんて得られない。むしろクリスチャンだから人に与えるために生きるべきなのだろう。しかし、俺が何を与えられるというのか。

聖歌隊で一緒にいる人たちは、年取っても幸せそうで、お元気な方がほとんどである。聖歌隊は、80、70 ぐらいの人がメインなので、俺なんかあの中では若手である。もう皆さん高齢だから、時々病気にはなられるけれど、前向きに病気と向かい合って、結局、病気や怪我があっても乗り越えている。

みんなインテリで、高学歴、お金だって持っている、家族もいる、趣味だって豊富な人たちだ。そして感心するのは皆きちっとオシャレを欠かさずになさっていることである。したがって、世間の常識で考えれば、恵まれたお年寄りなのである。

俺がもう 30 年も通っている心療内科の先生は、もう 80 ぐらいのはずだ。俺が最初に行った時が 32 歳の時で、それから他の心療内科に行ったこともあったけれど、結局、この先生とが一番縁があったみたいだ。この先生もおしゃれで、いつだってきちっとした格好をなさっていて、ダンディさを保たれている。

俺はこの先生が亡くなるのが一番怖いのである。おしゃれでカッコよくなさっているとは言っても、もう 80 歳ぐらいの人だ。

いつまでお元気でいられるのかわからない。いつかこのクリニックに行ったときに、先生がもう診察できなくなって、他の先生に変わったりなんてしたら、どうしようという気持ちもある。

そういう日が突然訪れるのが怖いのだった。

そんなわけで、不眠に悩み、自分の歳を憂い、周りの人たちがいつまで元気で入るのかということを心配し、別れやトラブルなどにも見舞われながら、俺はどうにか今生きている。

いつまで生きれるのかわからない。生まれ変わった猫のつもりで生きていけば、76くらいまでは生きることになるのだろうが、もっと短い可能性だってあるのだ。

この頃、時々転けそうになることが多くなった。胸の発作が辛いと思う。そして何よりも時間が潰せない。

俺の人生はやはり着々と老いに向かっていくのである。

とりあえず、他の先輩の先生たちを見習って老いでもオシャレをしなくてはといくつか通信販売で夏用のポロシャツを買った。年取っているからこそ、若い大学生が買うようなスポーティーなポロシャツだ。しかし、切ないなあ。これから俺はどういう気持ちで老いを迎えていくのだろうか。

3. ロマンティックハラスメント

① 涙は女の最大の武器

昔から「涙は女の最大の武器」と言われる。これに関しては、「自然に涙が出るんだったら仕方がないのよ」という女性もいるが、その一方で、「そうよ。女は泣けば済むんだも

の。涙は女の武器なんだもの」とそれを素直に認める女性もいる。俺は、女が男の前で泣くことは、その時の場合にもよるが、自分の期待通りの反応を男がしてくれない時に泣くことは、ハラスメントだと思っている。

『アセクシャル アロマンティック入門』という本を読んだ。男が女にするのがセクシャルハラスメントだとしたら、女が男にするのは、ロマンティック・ハラスメントである。まさに、これまで俺を傷つけた女性の何人かはロマンティック・ハラスメントだったのである。

大学の頃である。俺は例によって、女の子たちから「気持ち悪い」と言われる日々を過ごしていた。その中で一人、なぜか俺に対して恋心を抱いていた女の子がいた。

彼女はおそらく、あの頃悩んでいた。別に友達がいらないというわけでもないし、特別具体的な悩みがあるわけではなかったはずだが、大学生活が楽しくない。一人暮らしで、孤独だ。それで俺を口説こうとしていたのだ。

あの当時俺は断れない性格になっていた。あの当時の俺は、自尊感情が最低ラインに落ちていて、人の言いなりになることしかできなかったのである。

彼女が俺を誘ってくる口実は勉強だった。テストの前の日に、一緒に勉強してくれないかと誘ってくるのである。

俺は彼女が怖かった。彼女と限らず、俺が女性が怖いのは、女性はいつだって自分のペースにはめてこようとすることなのである。いや、そういう意識は彼女たちの中にはないだろう。ただ、女性の方が言語能力やコミュニケーション能力は上なので、男の方は女性のペースに巻き込まれるような

気持ちになっていくのである。

結局、何回か一緒に勉強はしたが、最終的には俺の方がはっきり振ったので、彼女は傷ついたはずだが、俺にとっても相当のトラウマなのである。今でも、彼女の顔が毎日のように浮かぶのだ。捨て犬のような、すがりような眼差しで俺を口説こうとしていた彼女。事あるごとに涙ぐんだような顔をする彼女。自分の弱さを武器に男の保護本能に訴えようとする彼女。自分の方が誘っているのに、自分の方が口説かれたような態度を取る彼女。俺にとっては恐怖の体験だった。

もう彼女も 60 歳のおばあさんになっているはずだ。おそらく、キャリアウーマンタイプの子ではないので、普通に嫁に行っただろう。もう孫もできているのだろうか。

今でも彼女の顔が毎日のように浮かんできては、「恨めしやー」と迫ってくる。もう絶対に会うこともないのだけれど。

② 感情を共有しようとする女たち

30 代半ば過ぎくらいの頃である。当時の俺は非常勤講師としてのコマ数は少なく、生活はギリギリだった。税金や保険も滞納していた。

ある大学（その大学はもう辞めたし、25 年も前のことなので時効だと思うから書くのだが）の女子学生で明らかに俺に特別な思いを抱いていた女の子（A 子）がいた。

A 子は 1 年生の時に俺のクラスで、明るくて元気いっぱいという感じの子で、ことあるごとに俺に懐いてくる子だった。とは言っても、そういう子は時々いるから、1 年生の頃は大きく気にはしていなかった。

A 子の存在がだんだんと鬱陶しくなっ

きたのは、彼女が 2 年生になってからである。その大学は当時 1 年と 2 年で同じ英語の先生の授業を取ってはならないというルールになっていたため、A 子は自分の仲良しの子（B 子）を俺のクラスに入れてしまった。そして、その子を出汁にして俺に時々絡むようになってきた。B 子の方は俺に関心があったわけじゃない。A 子に付き合っ

て、俺に絡んでいたのだろう。彼女は、ぶてぶてした厚かましいおばさんみたいな性格の子で、俺は苦手なタイプだった。一度などは、授業が終わった後バスを待っていると彼女たちと一緒にいる可能性があるもので、俺はわざわざ歩いて帰っていた。すると「國友せんせーい」と彼女たちの声が後ろから聞こえてきた。彼女たちの足音が聞こえて、おそらく B 子が走って俺の体にぶつかろうと思っているのだということが直感的にわかった。俺は一瞬、体を退けようかと思ったが、それをしてしまうと彼女は転けてしまう。躊躇していると、「どーん」、案の定、B 子は俺の背中にぶつかって来たのだった。

さらに、彼女たちは俺のことを「クニトモ！」っと、気安く呼び捨てにしてくることもあった。「映画奢って」と言ってくることもあった。タメ口どころではないのである。先生に向かって、いくらなんでも、馴れ合いが過ぎる。

彼女たちからしてみれば、悪気はないのである。俺の体にぶつかったり、俺を呼び捨てにしたりとかすることで、俺と近くなったような気になる。それが楽しいのだ。だけど、俺は彼女たちと近くなった覚えはない、近くなりたいとも思っていない。ズカズカ、プライバシーに踏み込まれて、セクハラさ

れている気分だった。

そして、彼女たちは3年生になり、B子は俺のクラスからいなくなった。俺はせいせいしていた。もう彼女たちから絡まれることも無くなるだろうと。

ところが、夏頃である。講師控え室の前でA子とB子ともう一人の彼女たちの友達の女の子3人が控え室の前で立っているのである。B子が控え室の扉を開けて、俺に手招きしてきた。「先生、来てきて」みたいな感じで。

あの当時、その大学の控室は出入りが1箇所しかなかった。そのため、出口を塞がれると他のところから逃げ帰るということもできない。まさにセクハラである。

俺はついに腹が立ってしまい、入り口のところに行くと「映画とかだったら、奢れないよ」と彼女たちを叱りつけた。

するとである。A子は泣き出したのだった。

「そんなんじゃないんですよ。A子が外人の男の先生に誘われているんです。」とB子。

「大阪まで一緒に食事に行かないかと言われています。食事だけだったらいいんだけど、京都から大阪まで車で行こうと言われていて、その車の中が怖いんです。その先生はみんなと仲良くなりたいたいという主義の人で最初の時間にみんなの住所と電話番号を書かせたんです。今日は用事があるからと断るとじゃあ、いつが開いているんだと聞かれるんです。教務にも相談に行ったんだけど、取り合ってくれないし、セクハラ委員会も一応あるんだけど、その先生自体がセクハラで有名な先生なんです。私は教職とっているから、時間にゆとりがないか

ら授業を落とすこともできないし・・・」とあれやこれや言ってくるのだった。

彼女が悩んでいるのは事実である。しかし、どれもこれも俺に言われても困ることばかりなのである。

それに、彼女たちが相当話を盛っていることは明らかだった。電話番号と住所を教えているとは言っても、A子は下宿生ではない。下宿の子だったら、部屋まで来られたらどうしようという気持ちにもなるだろうが、家族もいるのに大阪の実家まで誘いにくる事はないだろう。親に事情を話して、大学にクレームをつければいいだけの話だ。セクハラなんてことになったら、大学もほっておかないだろう。

食事に誘われているんだったら、B子と一緒に行ってもらったらどうかと俺は思った。そのことを言うと「私は滋賀だから帰る方向が逆だから」とB子。友達なんだったら、1日くらいついていってあげたらどうなんだ、友達がいのない子だと俺は思った。

セクハラ委員会の係の先生がセクハラ先生なんだと彼女たちは言うが、セクハラ委員会は何人も先生が係になっていて、その中には女の先生も含まれている。だから、セクハラ委員会の先生に相談できないなんて事はないはずなのである。

教務は取り合ってくれないとは言うけど、それはたまたまその時忙しかったから取り合わなかっただけの事だろう。「何回も言いに行ったら、必ず、取り合ってくれるから」と俺が言うと、「でも、何回も言いに行っていると、他のクラスメートの人たちに私がこんなことで悩んでいると言うことがわかってしまう」とA子。

この一言で、俺はカチンと来たのだった。親

にも言いたくない、教務にも言いたくない、他のクラスメートにも知られたくない、そんなことを俺に打ち明けてくるのは、明らかに A 子が俺のことを特別な人だと思っているからなのである。

俺は彼女の名前すら覚えていないのに、彼女は勝手に俺と親密になったような気持ちでいるのである。しかも他の先生も見ているようなところで泣かれたりしたら、俺の方が彼女に酷いことをしているようにも見られるだろう。

これは明らかにロマンティック・ハラスメントなのである。一般に女性は悩みを解決して欲しいから悩みを打ち明けてくるのではなく、自分の悩みを分かち合って欲しいから、悩みを打ち明けてくるのだとはしばしば言われる。しかし、俺は彼女たちのことを好きじゃないし、まして非常勤の身だから、女子学生のセクハラ問題にまで介入することはできないのである。そこまで介入していたら、俺の方が変に見られるだろう。だけど、彼女は俺の気持ちに全然気が付いていない。一人相撲をとってしまっている。とりあえず、その場は適当に逃れて、俺はその後、A 子が近づいてきても完全に気づかないふりをするようになっていった。彼女も俺が迷惑がっているということは気づいたみたいだった。彼女は傷ついただろうが、俺だって彼女にハラスメントされたのである。担任の先生だっているのに、非常勤の俺に、しかも足掛け 3 年も前に英語を教えたに過ぎない俺にこんな相談をしてくるなんて、これは正当防衛だと思ったのだった。おそらく、外人の先生のセクハラは起きなかったはずである。

③ 35 歳のふられ女性

そして、俺が 40 代の半ばの頃だ。

俺はその当時、ブログに日々の出来事を書いて毎日更新していた。読んでいた人は俺が当時関わっていた社会運動グループに出入りしていた人たちで、顔見知りの人たちだったのだが、一人、ある京都の出版社に勤める、見ず知らずの女性がフォローしてきた。そして、毎日のようにコメントを入れるようになっていったのだった。

彼女は 35 歳で男に振られたばかりだと言っていた。

「あの人、きっと國友さんのことを口説こうと思っているわよ。あんなしょっちゅうコメント入れてくるわけだから」と社会運動グループの女性たちからは言われた。

「國友さんのブログ読んでいると『優しい男の人』って感じるものね。あの年頃の女は焦るのよ。これ以上歳をとると子供が産めなくなると言うのがあるから」と他の女性からも言われた。

だけど、俺はそのブログに俺の写真すらあげていない。ただ、当たり障りのない風景の写真をアップしているだけだ。いくら、ブログが優しそうに見えるからといって、あんなだけ強引に俺を口説くようなことをして、もし会ってみて自分の好みじゃなかったら、どうするつもりでいるのか。

そして、ある日、ついに彼女は秘密のコメント（俺以外の人たちには見えないコメント）を入れてきた。「私は高校の時にリストカットをしたことがあるんです」と。

俺はこのセリフに切れた！彼女にキッパリ決別のコメントを入れた。「僕はあなたの期待しているような男ではありません」と。

女って、なんでこんななんだろうと思っ

た。

泣いたり、セクハラ相談を持ちかけたり、リストカットしたことを打ち明けてきたり、自分の弱さを語ることで、好きな男を口説こうとする。男はそうすれば自分になびくと思っているのだろうか。

そんなことはないだろう。普通の男は、むしろ女性の悩みなんて聞かされるのは負担に感じるはずだ。30年ほど前に『話を聞かない男 地図を読めない女』という本が大ベストセラーになったが、一般に男は人の悩みを聞くのは面倒臭いのである。まして、女性の悩みとなったら男にはわからない。なのに、女性たちは男に自分の悩みを聞かせようとする。

これは男が女にセックスを求めるのと同じ行為なのである。昔から、女は親密さと引き換えにセックスを許し、男はセックスと引き換えに親密さを与えられる。だとしたら、男が彼女でもない女にセックスを求めるのはセクハラなのだから、女が自分の彼氏でもない男に親密さを求めるのはロマハラ(ロマンティック・ハラスメント)なのである。

4. 女性には距離を置く

俺が結論として思うことは、女性に感情移入し過ぎると男は女嫌いになっていくということである。女性とは適度な感情的距離を置かなくてはならない。そうしないと彼女たちは、甘えてくる。

そして、何よりも腹が立つのは男がセクハラをするのは犯罪と見做されるのに女がハラスメントをするのは咎められないのである。

もう30年以上も前のことだ。俺がちょうど30歳の頃。俺は大阪の女子大学で非常勤で教えることになって、その専任の先生に前もって挨拶に行った。その時にその男の先生はこうおっしゃった。

「うちは女子大学だから、他のところよりもクールに接しておいてください。今はフェミニズムの時代だから、今の女子はちょっとでも女性差別を匂わせるようなことを言うと激しく反発するんです。その一方で、女の子だからある程度は優しくしてもらいたいんだという矛盾した欲求も持っている。だから適度に距離を置いておかないとトラブルに巻き込まれるんですよ」

また、同じ時期に大阪の大きな総合大学でも俺は非常勤を始めた。しばらく教えた後、その大学を紹介してくれた専任の男の先生に、「僕は薬学部が一番、好きなんです。よくできるし、真面目だし」と話した。するとその先生からは「薬学部は確かに真面目でよくできるけど、下手をすると甘えてきますよ。その点を気を付けておかないと」と言われたものだった。薬学部は女の子が8割以上だからなのである。

そんなわけで、男の先生たちはセクハラする先生もいる一方で、女の子にはある程度気を遣っているのである。女の先生でそこまで男の子に気を遣っている先生はいるだろうか。むしろ、女の先生だったら、女の子の方に気を遣うのではないか。「女の敵は女」とよく言われる。俺の同級生だった女性の先生も、「女子学生だと男の先生は揶揄われたり、虐められたりするだろうからやりづらいただろうけど、女だと嫌われるよ」と漏らしていたものだった。

そんなわけで、女性も相当周りを困らせる

ようなことはしているのである。しかし、マスコミは女性被害・男性加害ばかりを扱おうとする。男性被害の本もこの頃徐々に出てきているが、まだまだ少ないのである。それは女性のするハラスメントには、男性のするような痴漢や盗撮のような性的なものが含まれないからなのである。しかし、それは本質的な違いというか、性衝動や視覚的な欲望は女性の方が弱いからで、恋人でもない人に馴れ馴れしく迫ったり、親密さを求めてきたりするの女性なのである。俺はこれをロマンティック・ハラスメント（ロマハラ）と名付けたいと思う。

5. 『ビッグ・ウェンズデー』（ジョン・ミリアス監督・1978）

いつにも増して、女性批判を書いてしまった。これは俺がこのゴールデンウィークに里帰りして、また例によって、昔のトラウマを思い出してしまったからである。

断っておくが、俺は男女平等が悪いとは言っていない、女性が管理職や政治家になるのは大いに結構だと思っている。男が悪くないとも言っていない。男も反省すべきところはたくさんあると思っている。ただ、一番腹が立つのは男性の被害者性や女性の加害者性を否定する人たちなのである。

俺はそのことで散々苦しみ、不登校になった。

不登校になった直後に俺が見た映画が『ビッグ・ウェンズデー』である。この映画はGWの公開だった。

サーフィンをモチーフに男3人の友情を描く映画である。俺は、当時こういう男同士の関係にものすごい憧憬を感じていた。

しかし、俺は運動神経ゼロだった。サーフィンなんて、柄でもなかった。海パンになるのが似合うタイプじゃなかった。そのため、俺は男の友情に憧れながらも、それを紡げなかったのである。

俺は基本的に体育系の奴が好きだ。だけど、俺自身はスポーツができない。そのため、映画でスポーツものを見て憧れるだけしかなかったのである。

切ない。

俺は高校には3日くらいしか言っていないが、そこで見た体育の先生は例によって若くて訳もなく生徒を殴るような人だった。できない子がどれだけ辛いかを考えようもしないタイプだった。これから3年間、この高校ではやって行かれない。それが俺を不登校に追いやっていく、一つの要因でもあったのである。